

旅路

放送日 昭和37年4月15日
番組名 グランド劇場
(東京・大阪ガス)
制作 NETテレビ
演出 山本隆則
音楽 渡辺 浦人

登場人物

真山 仙蔵 森 雅之
つぎ 赤木 蘭子
洋一 波多野 憲
健二 中谷 一郎
麻子 吉行 和子
紀子 奈良岡 朋子
静男 葉山 謙二
写真屋 久尾 近藤 準
女中 竹 阿部 光子
老婆 五月 藤江
巡查 渡 真二
洗濯屋 園田 裕久

高橋玄洋

山脈の彼方に消えてゆく一本の送電線を画いた単彩画。

Wって

静かな水面を三艘の舟をひいて去る曳船の単彩画。

Wって

河口に近い田圃の中の川面にかかった一枚板の仮橋を自転車をひいて渡ってゆく旅人の点描。

Wって

1 緑生園の廊下

静男（八才）が独りコンクリートの床に落書きして遊んでいる。（養老院と云う一般概念とはほど遠い近代建築である）

老婆がやって来て落書きを覗き込む。

静男、逃げようとする。

老婆 そんなに怖がらんでも……お婆ちゃん、鬼婆じゃないんよ、本当よ、……お婆ちゃん、当てるみようか、……坊やの名前は……真山……。

静男 真山静男！

老婆 何年？

静男 桜田小学校一年雪組。

老婆 そう、はっきりして……いい子なこと。……お爺ちゃんに会いに来たのね。

静男、首をかしげ、

静男 ぼくの？

老婆 そうよ。

静男 誰が？

老婆 そう、坊やお爺ちゃん知らんの。

静男 知ってるよ、ここヨーロッパインだろう。

老婆 そうよ、お爺さんやお婆さんが沢山居るアパートなんよ、いい処よ……坊やもここへ来んかね、皆に可愛がって貰えるよ。

静男 嫌だ！（又、落書きに熱中する）

老婆 ハハ、可愛いもんじゃなあ……こんな時分もあつたのにな、家の正彦にも……。老婆、じっと静男を見て目頭をしょぼつかせる。

バックの扉の表札に「真山仙蔵」と出ている。

2 同 仙蔵の部屋

仙蔵（七二）が次男健二の妻、紀子（三六）と話している。
 明るい感じの和室にずっしりした絨氈が敷いてある。

他に茶箆筥等――

仙蔵 （お茶をたてながら）これでいいんですよ。

紀子 いいえ、よくありませんわ。

仙蔵 いいんです。

紀子 よくありません。

仙蔵 いいんだよ、これで……。

紀子 せめて、私だけにでも相談して下さいよ……。

仙蔵 大反対のお小言をうけたまわるだけだ。ハハ、そうだろう？

仙蔵、お茶を出す。

紀子 今からだって遅くはありませんわ。家も決して広い方じゃありませんけど、お父様のお部屋ぐらい何とか致します。もし、アトリエの匂いがお嫌いなら、庭に離れを造ってもいいんです。今度のことは、健二もとても気にしています。

仙蔵 この間、週刊誌で写真見たよ。

紀子 お蔭さまで、世間では売れっ子などと云われている様ですけど……。

仙蔵 あいつも、いい年になつとる。いくつになりました。

紀子 たしか四十です。

仙蔵 もうそんなになりますか。

紀子 ね、お父さま、……私は、健二がお父様のもとを飛び出した頃の事情はよくは知りませんが、お父さまは、まだそのことに……。

仙蔵 いや、そんなことにこだわってなんかいやしないよ。

紀子 ではどうしてここへ……。

仙蔵 紀子さん。あんた達は、このことを知らんのだよ。これで仲々老人にはよく出て来てるんだ。冬は暖かいし夏も涼しい、眺めはいいし、ゴルフがしたければコースへも出てゆかれるし、釣りがしたければ一日釣堀で遊んでもいられる……。誰に気兼ねする

こともない……。お茶が冷めるよ。

紀子 ハイ。

仙蔵 あんたの方が心配してくれるのは大変有難いんだが、これからの私には、この生活が一番似合ってるような気がするんだ。……ねえ、紀子さん。

紀子 ……？

仙蔵 あんた達も、いずれは子供を手放す時がやって来る。その時になったら、今の私の気持がきつと判ってくれるよ。

紀子 子供に負担をかけたくないとおっしゃるんですか。

仙蔵 それもある……が、もっと別な処で、子供を拒否した世界で生きてみたくもなるもんだ。

紀子 子供を拒否すると申しますと？

仙蔵 親を卒業して、真山仙蔵個人としてだよ。

紀子 親子の関係って、そんなに簡単に割り切れるもんでしようか。

仙蔵 簡単じゃないさ。私もこの歳になってやっとそんな気持ちに踏み切れたのだ。

紀子 そうだとしたら、淋しいことですね。親子って……。

仙蔵 淋しいものさ。だが子供はいずれ親のもとを去ってゆく。それが子供の運命なのだから仕方がない。……淋しいからと云って、身体をすりよせるのは、独立して立派にやってる子供達にとつて、邪魔になるだけだ。……子供が一人前に独立した後の親子は、お互いに都合のいい時だけ、親子として付き合えばいいんじゃないかな。

紀子 私などとてもそんな……考えるだけでやり切れませんわ。静男が、そんな他人み

たいになってゆくなして……。

仙蔵 あんたが今からそんな気になるのは早過ぎるよ……私は三人の子供を失って、やっと親を卒業する気になったんだ。……親なんてもう御免だ。これからの余った生命は自分のために使おうってね。ハハハ……そうだ、紀子さんにあれを見て貰おう。

仙蔵 アルバムを取りに立つ。

仙蔵 あんた、健二と結婚したのはいくつの時でした。

紀子 二十三です。

仙蔵 そう。……きつと貴女のお父さんには、その頃のあんたの顔が忘れられんよ。……去ってゆく前の娘の顔が、(戻って来て)これは私の財産でね、親としての。(仙蔵、アルバムを開いてみせる)この写真は、長男の洋一が南方へ行く前の晩にとったんだがね。

紀子、写真を覗く。

その写真。

洋一(二五歳)、仙蔵(五三歳)を中心に、つぎ(五〇歳)、健二(二〇歳)、麻子(二八歳)、女中の竹(二一歳)がいずれも戦時色豊かに堅くなって並んでいる。

紀子 亡くなられたお母様ですね。

仙蔵 うん、洋一が二十五歳、健二はまだ徴兵検査前だったろう……。これが洋一の最後の顔です……。

3 真山家の応接間

写真の様に並んでいる家族。

写真屋の久尾が洋一の服など直して引き下がる。

(酔客の軍歌が聞えている)

仙蔵 (洋一に) どうだ?

洋一 (期する処がある様に頷く)

写真屋の声 じゃ、宣しいですか、ハイッ。

マグネシウムが焚かれる。

久尾 どうも御窮屈さまでした。(と進み出て突然)真山洋一君、バンザイ! バンザイ!……武運長久をお祈り致します。

一同、呆気にとられるが――

洋一 有難うございます。

仙蔵 さあ、君もあつちで、一杯やってくれたまえ。門出の祝いだから……。

久尾 とんでも御座居ません。私なんか。

洋一 まあ、いいじゃありませんか。

つぎ どうぞ、竹ちゃん御案内して。

久尾 じゃ、……何かお手伝いすることがありましたら……。

久尾、竹に案内されて去る。

つぎ 洋一、苦しいんじゃない?

洋一 ううん、大丈夫。

つぎ 余り飲み過ぎない方が……。

仙蔵 なに、気が張つとる時は酔わんもんだ。
つぎ 少し休んでいったら、ここで……。

洋一 そうだな、皆からさされるんで少し参った。

洋一、ソファに坐る。

仙蔵 (麻子に) 酒どんどん運べよ。(と去る)

健二 (麻子に) 水持つて来てくれ。

麻子 自分でお飲みなさいよ、水位い……非常時よ。

健二 馬鹿、洋兄さんのだぞ。

麻子 そんなら、汲んで来る。

麻子も去る。

健二 あいつ、文科は非国民だと思つていやがる。

洋一 (眼をあけて) お前、いつまで休めるんだ？

健二 明日まで……明後日から、又旋盤工ですよ。

洋一 もうすぐだな、お前も。

健二 学徒動員令つても出来たしね。どっち道……。

洋一 俺も兵隊として行くわけじゃないから、最前線に行くことはあるまいけど、どう情勢が変らんとも限らんからな。

健二 資源開発調査団つて、何をやるの？ 石油？

洋一 石油もやるし、色々さ。

健二 しかし、折角、調査したつて、日本へ持つて来れるの？、大分沈められてるつて

云うけど……。

洋一 現地に工場を建設することだつてあるさ。

健二 聞いたんだけど、船に乗つてる間は、なるべく甲板近くにいることだそうだよ。

万一の場合。

洋一 健二、そんなに命が惜しいのか。そんなことじゃ、今の決戦下に生きてはゆけんぞ。

健二 別に惜しがつてゐるわけじゃないけど、ただ無駄死にすることはないから……。

洋一 何が無駄死にだ！

健二 じゃ、何ンにも心残りはない。兄さん？

洋一 (健二をじつと見る)

健二 (も、じつと洋一を見る)

洋一 ……そりゃ、無いことはないさ。だけど、それを云つてたらどうなる？ 今の日本は総力を挙げて戦うより他に道はないんだ。そうだろ？……命を惜しんでじつとしてたら、それこそ国難を待つばかりだ。……お前ともよく喧嘩をしたが、楽しい思い出。俺はそれでいい。それに今度の派遣隊の仕事は、いわば南方局長としてのお父さんの仕事だ。それを実践できるだけでも俺は恵まれていると云わなくちゃならん。

健二 兄さんは、高等学校も大学もお父さんの期待通りに来れたから余計そう思うのかも知れないな。

洋一 お前はどうかんだ。

健二 僕だつて、お父さんは好きだよ。

洋 一 少し頑固だけどな、ハハ。
健 二 ……兄さん、この間、銀座を一緒に歩いてた人ね。……あの人どうして今日招ばなかつたの？

洋 一 お前いつ見たンだ……。

健 二 電車の中から、チラツと。

洋 一 お父さんやお母さんに、無駄な心配させることないじゃないか。……黙つといてくれツ。

健 二 そうかなあ。

麻子が水を持って入って来る。

麻 子 ああ、忙がしい忙がしい……健二兄さんも少し手伝つてツ。

洋 一 麻子も聴いてくれ。兄さんは明日出発したら、どういうことになるか判らん。後のことは、お前達二人に頼むより他にない。……お父さんは、大東亜省の中でも、次は次官だと専らの評判だ。決して、お父さんの顔に泥をぬる様なことだけはしてくれなよ。頼んだぞ。

健 二 うん。

麻 子 (うなづく)

洋 一 (手を出す)

健 二 (握手して) 兄さんも気を付けてね。

洋 一 ああ、(麻子に) お前も、もう直ぐ海軍士官の妻だな。……結婚式には出られんが、しつかりやれよ。

麻 子 ええ。

洋 一 (水を飲む)

三人の男がどやどやと入って来る。

男 1 おい、ここだここだ。

男 2 どうしたい？ あつちで飲もう。主賓がおらんじゃ話にならんじゃないか。

洋 一 うん、行く行く。

男 1 出征の前と云うのはな、しこたま飲んで、肚一杯歌って……それで過去をシャツトアウトするのさ。

男 3 こら、シャツトアウトは敵国語だぞ。切断……切断じゃ感じが出ねえな。

男 2 さあ、行った行った。

洋一、ひっぱられて出て行く。

健 二 奴ら、早く帰ればいいのにな。

麻 子 失礼よ。お祝いに来てくれてるのに。

健 二 兄さんだって、今晚ぐらい一人で、くつろぎたいさ。二十年、一緒に住んで来た家だもの。

健二、窓辺へ行く。

麻 子 兄さん、泣いてるの？

健 二 (顔をそらす)

麻 子 兄さんて、センチね。

健 二 お前は、立派な軍国の妻になれるさ。

健二も出て行く。
(座敷の軍歌が益々大きくなってゆく)

O・L

4 玄関

大きな柱時計が二時を指している。

(もう静かになっている)

竹が宴会の片付け物をもって二階から降りて来て居間へ――

5 居間

仙蔵と洋一がお茶づけをかき込んでいる。

他に、つぎ、健二、麻子。

つぎ 千人針入れたらうね。

麻子 お母さん、何遍同じこと聞くの？

つぎ こんな時には、思いがけない物を忘れたりするもんですよ。

健二 皆で伊香保へ行ったとき、母さん革布さいふ忘れて二人で一日喧嘩してたね。

仙蔵 うん、そんなこともあったナ。

健二 あの時、どうしたの？

つぎ なにね、お父さん、内緒のお金持っておいでたんだよ。それをチビリチビリしか
出さないもんだから……。

麻子 一寸も気づかなかったわ。

洋一 そりゃそうさ。俺と健二で小遣い出してお前のオモチャ買ったんだもの。

健二 松笠のヒヨコさ。

麻子 覚えてないわ。

仙蔵 ハハ、いい時代だったな。……まだわしが本省の課長になる前だ。健二は修学旅行の土産に耳カキを買って来た。

健二 金が無かったんだよ、あの時も……。

一同 (笑う)

つぎ この次、こうやって皆一緒になれるのは何時のことでしょうね。

洋一 なに、案外、健二とジャングルの中で会ったり、富永君と飛行場で会えることがあるかも知れませんか。

健二 富永さんからは便りあるのか。

麻子 (首を振って) でも大丈夫よ。あの人、不死身だから。

健二 案外海兵出身者は、決戦に温存してあるんだってデマが飛んでるな。

仙蔵 そんなことがあるもんか。山本司令長官がボルネオで戦死されるような時だ。

つぎ さあ、少しは寝なきや、明日、又早インですから……。

洋一 うん。

洋一、立とうとしてよろける。

つぎ どうしたの？ 大丈夫？

洋一 大丈夫、大丈夫。

洋一、台所へ行く。

つぎ 苦しいのね、飲みつけないお酒を飲むから……。

つぎも立って、流しの前にささえてやり、背中をさすってやる。

じつと見ている仙蔵。

仙蔵 (現在の声) 私は今も、その時の洋一の顔を覚えています。自分ではどうにも出れない苦しさを訴えかけてる仔犬のような眼で、私を、悲しそうに見ていたのが今も忘れられんのです。

洋一、うつむいた顔から上目づかいに、悲しそうな恥かしそうな眼をじつと仙蔵に向けている。

O・L

6 写真

仙蔵 (現在の声) 洋一は、私の期待通りに出来上った様な子でしたが、それだけに自分で単立つ力を持てなかったのかも知れません。……目的地に着く前に輸送船と共に沈んだのですが、……この晩も、もう白みかけた頃でした。

O・L

7 応接間

(窓外が白みかけている)

寝巻姿の洋一が電気もつけず窓辺に立って歌(未完成)を口ずさんでいる。

8 玄関

仙蔵が階段の途中まで下りて来て、耳を傾けている。

廊下に、居間からつぎが出て来る。

9 応接間

洋一、歌い終る。

仙蔵、入って来る。

仙蔵 ……どうした？

洋一 ううん。

仙蔵 寝られないのかい。

洋一 ……ね、お父さん。……これでいいのかな。

仙蔵 何が？……今更ら南方行きにおじけづくわけもないだろう。

洋一 そんなことありませんよ。でも、……何か忘れてるような気がしてならないんです。……もう少し何かがあってもよかったですよ。……いいえ、不平とか不満とか云うんじゃないんだけど……もう一つ割り切れたらと思うんです。

仙蔵 少し疲れたんだらう。……三十分でも、一時間でも寝るといい、そんな恰好じゃ風邪をひくぞ。

洋一 ……え、でも、いい天気でよかった。見送りの人達にも迷惑かけないで。

二人、隣家の屋根の上の夜明けを仰ぐ。

仙蔵 (現在の声) もう少し、優しい言葉をかけてやればよかったと今も思います。……公報が入った当時、油の海に浮かんでいる洋一の姿を随分夢にみました。馬鹿なもので……船の中にとじ込められてるより、せめて、水面に浮び出て呉れてたらと思うんで……

すよ。

O・L

10 デッサン

三艘の舟をひいてゆく曳船の単彩画。
やや遠くなって二艘の舟をひいて去る曳船の単彩画。

11 玄関(夕)

けたたましく仙蔵が帰って来る。

仙蔵 おい、健二は居らんか。おい……誰も居らんのか！

つぎ、出て来る。

つぎ どうしたんですか、大きな声で……。

仙蔵 健二は?!

つぎ 先刻まで、そこで絵を描いていましたかね。

仙蔵 けしからん奴だ。……親に恥をかかせやがって……。

12 応接間

健二が久尾をモデルにしてデッサンしている。

つぎの声 何か又やっただんですか、あの子……。

仙蔵の声 何もやったらんのだ。就職の手続きを……。

久尾 いいんですか、健ちゃん。

健二 ……。

仙蔵、荒々しく入って来る。

続いてつぎも――

仙蔵 おい、健二ッ！ お前、何処の試験を受けにいったんだ！

健二 ……。

仙蔵 (久尾に) 君、済まんが帰ってくれませんか。

久尾 ハイ、坊ちゃんが絵描いてやろうとおっしゃるもんだから、つい上り込んで……。

(立ち上る)

健二 いいよ、帰らなくても……。

仙蔵 何だっ！。

仙蔵、健二の頬を叩く。

つぎ お父さん……。

久尾 そ、そりゃいけません、真山さん叩いたりしちゃあ……今は民主々義なんだから……。

仙蔵 民主々義なら、子供はどんな真似をしてもいいのかい。

つぎ 一体どうしたって云うんです。

仙蔵 わしが頼んでおいた、東洋海運の試験に行っていないんだ。

つぎ だって……健二、あの日は出掛けたじゃないの、何処へ行ったの？

健二 ……。

仙蔵 何処へ行ってた？

健二 上野です。

仙蔵 上野っ……何しに?!

健二 絵を観に……。

つぎ まあ、何て人でしょやね、この子は……。

仙蔵 今時、絵なんかでめしが食えると思つたら大きな間違いだぞ。第一わしはお前を
絵描きなんかにするために大学へやったわけじゃない。それに、あの会社が気に喰わん
のなら、ちゃんとそう云つたらいいんだ。他へ紹介してやらんものでもない。……実際、
お前なんか有難く思わなきゃならんだ。何のつてもなくて就職出来ん人間がうようよ
してる世の中なんだぞ。

つぎ で、何処か他に願書出してあるの?

健二 (首を振る)

久尾 健ちゃん、そりやいけないわ。今はうかうかしてると野垂れ死にする時代なんだ
から。

仙蔵 君は何だね。家が焼けたから、離れを貸してあるだけじゃないか。家族みたいな
こと云わんでくれ給え。

つぎ お父さん、そんな……(久尾に) 済みませんね。

仙蔵 まあいい。特別に追試験をやつて呉れるそうだから、明日行つて来なさい。

健二 ……。

仙蔵 どうなんだ、行くのか、行かんのか。

健二 (ぼそりと) 行きます。

仙蔵、出て行く。

つぎ 済みません。追放されてから、気むずかしくなつて……。

久尾 いいえ、私のことなら、……旦那も、洋一さんの戦死がこたえてるんですよ。
麻子の声 馬鹿ねえ、兄さんも、試験位い受けときゃいいのに。

入口に麻子が立っている。

麻子 白紙で出せば、必ず落して呉れるわよ。昔から要領が悪いのよ、兄さん。

健二 出戻りはだまつてる。

麻子 (ニヤリと笑つて) はた迷惑だわ。お父さんの御気嫌そこねると……。

つぎ あんたのことだつて、お父さん、あれで随分心配なさつてるのよ。

仙蔵の声 おい! おい!

つぎ はい、只今……。

久尾 じゃ、私も今日は、これで……。

健二 済みません。

つぎ 御免なさいね。大変なところお目にかけてしまつて……。

つぎと久尾、出て行く。

麻子 うちじゃ洋一さんが余ンまり出来過ぎてたから……いけないのね。……優等生だ
つたから、人生の……。

13 居間

仏壇に洋一の写真が飾つてある。

仙蔵が紙を持って入って来る。

食事の用意が大方出来上っている。

仙蔵 健二は何処だ。

つぎ (台所から) 先刻出掛けたようですよ。叱られたから気晴らしに散歩してるんですよ。

仙蔵 全く気の弱い奴だ……絵の道具、当分取り上げときなさい。

つぎ 趣味でするんでしたら、構わないじゃありませんか。

仙蔵 それが健二には出来ンのだ。あいつには、程々ということが無い。好きだとなつたら、自分がおさえられんのだろう。

つぎ 貴方に似てるんですよ。貴方にもそう云う処があります。

仙蔵 兎に角、就職するまで預かっときなさい。

つぎ ええ……でも、貴方も少しはあの子の意見を聞いてやらなきやあ。

仙蔵 聞いてやってるさ。ただあいつが云わんだけだ。

つぎ 頭ごなしに、やっつけなざるから云つても同じことだと思っんでしょ、きつと……。

仙蔵 あいつのやる事は危なっかしくって見ちゃおれん……。

つぎ 麻子ちゃん、御飯ですよ。

つぎ、食事の用意を終る。

(玄関の鈴が鳴る)

つぎ 健二かい。

健二の声 ええ。

つぎ 御飯ですよ。(仙蔵に) 何にも云わないで下さいな……私からもよく云っておきますから。

仙蔵 ……。

健二、やって来て、食卓に坐る。

つぎ 何処まで行ったの？

健二 その辺ぶらっと……煙草の配給並んでたよ。

つぎ そう？

麻子もやって来る。

仙蔵 おい、書いといてやった。……わしが書いた位い直ぐ判るだろうが、まあ、それもいいだろう。

麻子 (明るく) 判るわよ。兄さんの字は特別お上手なんだから……。

仙蔵の書いたのは履歴書である。

健二 (じつと、履歴書を見つめているが、顔がゆがんで来る) 父さん！

仙蔵 うむ？……ハハ、うまいもんだらう。

健二 ……お父さん、……勘当して下さい。

仙蔵 な、何だと？!

健二 どう考えても、絵を諦める気になれないんです。

仙蔵 もう一度云ってみろ。

つぎ だから趣味でやれば……仕事は他にもって趣味でやればいいじゃないか。

健二 それが出来る位いなら……お願いです。勘当して下さい。

仙蔵 馬鹿！ 勘当だと?! お前これでもまだ、わしの気持ち判らんのか。

健二 判るから、お願いしてるんです。僕はとてもお父さんに期待して貰える様な人間にはなれません。

仙蔵 成れるか成れんか、やってみなきゃ判らんじゃないか。

健二 小学校の頃からよく判ってますよ。……一度だって期待通りの成績をとったこともないし、大学には滑るし。

つぎ でも免に角、卒業出来たじゃありませんか。

健二 そりゃ、戦争のお蔭ですよ。元々お父さんは、無いものを僕に要求してるんだ。……僕には絵を描く以外、何の才能もないんですよ。

仙蔵 馬鹿者！（茶碗を投げようとする）

つぎ 何をなさるんです！

健二 そうですよ。僕は馬鹿者ですよ。兄さんの様な秀才とは違うんだ。

つぎ 止めておくれ、もう……。

仙蔵 何をぬかす。洋一に出来たことがどうしてお前に出来んのだ。

健二 僕と洋兄さんは違いますよ。……でも、洋兄さんが今居ても、おそらく、父さんの思い通りにはなってますよ。

仙蔵 いつ、わしが洋一を思い通りにした？ あいつは素直な奴だから、わしの意志を継いでくれただけだ。

健二 そう思ってるのは、お父さんだけだよ。……兄さんだって苦しんでたんだ。

仙蔵 何を……何を洋一が苦しんでいたと云うんだ、云ってみろ！ 云ってみろ。

健二 ……。

仙蔵 フン、云えんだろう。云えるはずがない。……勝手な推量を云うな。

健二 じゃ云いましょうか。
つぎ 止めておくれたら……昔は、あんなに楽しかったじゃないか。……どうしたと云うのこの頃は……みんな……。…（涙声になる）

麻子 ……落着いて御飯も食べられやしない、この家は……。

つぎ 麻子、お待ちなさい。

仙蔵 （呼吸をととのえて）云ってみろ……洋一がどんなことで苦しんでた？

健二 兄さんにはね、将来を約束した人がいたんですよ。

仙蔵 （一寸動揺する）それがどうだと云うんだ、二十五にもなれば当り前のことじゃないか。

健二 じゃ、父さん。僕にそう云う人がいると云ったら、黙って会って呉れますか。

仙蔵 馬鹿！ 洋一とお前と一緒になるか。お前だって一人前の男にしてやりたいと思うから……。

健二 だから一人前の絵描きになります。

仙蔵 絵描きでめしが喰えるか。

健二 食べられなくても結構です。好きなことをやれば……。

仙蔵 上野の地下道に住みたいか。

健二 絵を諦めるよりましです。

仙蔵 勝手にしろ……。

健二 ……。

つぎ 健二、お父さんにお謝まんさい。……謝って頂戴、お願いだから……。

健二 何を謝るんです？

仙蔵 こいつ！……親を恨んでるな。

健二 だから、何も判ってないって云うんだ。

仙蔵 何をッ！

仙蔵、健二に襲いかかり、健二、廊下へのがれて乱闘となる。(が、画面からは見えない)

つぎも追ってゆく。

つぎ よして頂戴！ 健二も……何をするんです。

つぎの声 ……麻子！ 来ておくれッ。

仙蔵の声 出て行けッ！ お前みたいな奴はわしの子供じゃない。

健二の声 ええ、云われなくても……。

つぎの声 健二ッ！

無人の部屋に茶碗の御飯が散らかっている。

(玄関の鈴が鳴る)

14 応接間

荒い息の仙蔵が机に向って唇を噛んでいる。

仙蔵 (現在の声、静かに) 親子と云うものは、業の深いもんで、可愛ければ可愛いほど気持ちを通じ合わないもどかしさに煮えたぎるものらしい……愛憎と云う言葉があるが、愛も憎しみも親子の間では、人一倍煮つまるんだねえ。……私は健二に去られてつくづく親と云うものの弱い立場を知らされました。

15 居間

つぎが戻って来て、背中をまるくして嗚咽する。

仙蔵 (現在の声) ……家内も随分参っていた様だがそれでも女親だ。私に隠れて時々会いに行ってた様でしたが、その家内も翌年流行した風邪がもとで亡くなってしまいました。

16 デッサン

二艘の舟をひっぱっている曳船。

一艘の舟をひっぱって小さくなってゆく曳船。

17 居間(昼)

洋服箆笥が増えている、縁先に久尾が来て麻子と話をしている。

麻子は洋服を出して整理している。

(二人が笑った処)

久尾 いや、私も、あの時間になると女湯が空になると云う話は聞いてましたがね。まさか、プロマイド持って来て、このマチ子巻そっくりに写してくれっるのが出て来るとはねえ。

麻子 夢に飢えてるのね、今の若い人達……。

久尾 若い人達って、お嬢さんだって未だ……。虫干しですか。

麻子 いえ、冬ものと夏もの入れかえようと思っ……。

久尾 よくやりますねえ。お勤めもあるって云うのに……。お母さん亡くなられて、幾年になりますか？

麻子 五年ですわ。

久尾 もうそんなになりますかねえ……。そうだ、帝銀事件の直ぐ後でしたからね……。あつ、お早うございます。

仙蔵が奥からやって来る。

仙蔵 (麻子に) おい……。今日は行かんでもいいのか。

麻子 遅れて行ってもいいのよ……。朝鮮戦争が休戦になってから案外暇なのよ。

久尾 アメリカさんは週五日だからいいですなあ。

仙蔵 もうそろそろ辞めた方がいい。あんな処は……。

麻子 ……ええ近いうちに辞めます。

久尾 ……どうも、お邪魔しました。

麻子 いいえ。

久尾、帰ってゆく。

仙蔵 (見送って) 何しに来るんだ、あいつは……。

麻子 暇なんでしょう、今頃はみんなカメラ自分で持ってるもの。

仙蔵 本当に辞めるのか。

麻子 ええ。

仙蔵 それがいい。物価も安定して来たんだから、わしの恩給と顧問料で、お前と二人位いどうにか食ってゆけるんだ。

電話が鳴る。

麻子、急いで玄関へ。

18 玄関

麻子、来て受話器を取る。

麻子 ハロー(以下英語で) ええ私……。ええ、大丈夫、着々進行してるわ。そう、それは有難う。(等、言葉少なに応答している)

19 居間―台所

仙蔵、撫然として聞いている。

台所口から洗濯屋がやって来る。

洗濯屋 御免下さい。洗濯屋ですが……。

仙蔵 ……今日は無いだろう。

洗濯屋 あの、来る様に云われたんですが……。

仙蔵 じゃ、一寸待ちたまえ。
洗濯屋 いい天気が続きますねえ。

仙蔵 ……。

麻子、戻って来る。

麻子 あッ洗濯屋さん…これ、お願いします。

麻子、風呂敷のものを渡しながら目配せする。

洗濯屋 じゃ、どうも…。(去る)

仙蔵 あんなに一辺に出して大丈夫なのか。

麻子 夏もの整理しちゃうのよ。

仙蔵 麻子、いつも掛かって来るヘンリーって男、あれは何なんだ？

麻子 何なんだって…上役だと云ったでしょ。

仙蔵 それは判つとる、お前の何なんだと聞いてるんだ。

麻子 友達よ。

仙蔵 唯の友達だな。

麻子 お父さん、私が誰かに奪られないかと、そればかり心配してるみたいね。

仙蔵 そんなことあるものか、お前がそのつもりなら、何時でも再婚するがいい、わたしはそれまで止めやせん。

麻子 その心配ならいらぬわ、富永との生活で、いい加減こりてるから…。

仙蔵 あれは両方とも若過ぎたのだ。

麻子 お父さんが決めて呉れたのよ。済んだこと、どうでもいいけど…。

麻子、立って台所へ行く。

仙蔵 お前だって、承知したから嫁ったンだろう。自分の責任を人に転嫁するのは止しなさい。わしだって親としての責任は充分感じてるんだ。…それに云つとくが、わしは女が外で酒を呑んで来る様なことは大嫌いだ、それ位判ってるだろう。

麻子 仕方がないわ、つきあいだもの。

仙蔵 あのヘンリーって男とつき合うの止しなさい。第一非常識だ、たびたび電話なんか…。

麻子 向うじゃ普通のことなのよ。

仙蔵 ここは日本だ…それに母さんだって喜ぶ筈がない。

麻子 お父さん、私、もう二十九よ…自分のやること位責任を持っています。

仙蔵 どう云うことだそれは…？

麻子 自分が損する様なことはしません。

仙蔵 それが危ッかしくって見ちゃおれんだ。わしには…お前なんか、まだまだ子供だよ（と朝食に箸をつける）…そこへ行くと昔の若い者はしつかりしとったもんだな。洋一をみなさい。二十五で派遣隊の隊長だった。

麻子、食べる仙蔵をじっと見ている。

麻子 洋兄さんは倅せね。

仙蔵 （顔を上げ）何が？

麻子 （お茶をくみながら）何にもしなくていつも賞められてるんだから…。

仙蔵 ……。（麻子を見つめる）

麻子 御飯ついできましようか。

仙蔵 いいよ。

麻子 (時計を見て) じゃ、行って来ます。……お昼、棚の中に用意してあります。
仙蔵 うむ。

麻子、バックなど用意して、靴下を引上げ台所へ。

仙蔵 ……お前がお勤めやめたら一辺、伊香保へでも遊びに行くか。

水を飲みかけてた麻子、急にケラケラと笑い出す。

仙蔵 何がおかしい。

麻子 お父さんとじゃ、つまんないわ。

麻子、はしゃいで居間を通り抜けて去る。

仙蔵 今日は早いのか？

20 玄関

麻子、その声に一寸止るが、齒を喰いしばってそのまま出てゆく。

21 居間

ぼそぼそと独り食事をする仙蔵。

(玄関の鈴が鳴る)

22 深夜の玄関

階段を寝巻姿の仙蔵が降りて来る。

玄関の下駄をみて、後の柱時計を振仰ぐ。

二時である。

仙蔵、応接間のドアを開けてみて――

廊下を居間へ。

23 居間―台所

ひっそりしている居間。

仙蔵、居間を通って台所へ――かすかな期待を残して障子をさっと開ける。
ガランとした台所。

仙蔵、がっかりして食卓前に坐り、肩を落す。

仙蔵の声 到頭……あの電話の野郎と何処かへ泊ったんだ……そうだ、その他には考えられん。……フン、毛唐なんかとッ!

仙蔵、台所に立ってゆき、一升びんを傾けてコップ酒を飲む。

食卓へ戻って坐ると急に顔を苦渋なものが走る。

仙蔵、箸筥へ走り、小抽出しを抜いて、通帳類を探してみる。

――無い――

あわてて抽出しを開けてみる。(空っぽになっている)

洋服筥へ走る。

中のカーテンを払いのける。ハンガーだけがぶらぶらしている。

逆上した仙蔵は、鏡台の抽出しも開け、押入れも開けてみる。しかし、何が有り何が無くなっているかはわからない、ただそうせずには居られないからしているだけだ。

台所へ走り、何に手をつけていいか判らず、まごまごして、水道をひねってみて、又居間へ走り上る。

居間の電灯が大きくゆれる。

仙蔵 (現在の声) ……今日の今日まで平常と一寸も変った処を見せなかったあの麻子が……まさかここまでたくらんでいたとは……あの洗濯屋まで使って何故逃げだす必要があったのか。……私のすることは、後は書き置きの手紙を探すだけだった。

24 応接間

仙蔵、やって来ると自分のデスクの辺りを探し出す。

——次第に落着いて来て、ゆっくり探すは何も出て来ない。

(電話が鳴る)

仙蔵、憑れた様に玄関わきへ。

25 玄関

仙蔵、受話器の前に立って、ひと呼吸してから取る。

麻子の声 (フィルター) もしもしお父様? 麻子、行きます。……アメリカへ。

仙蔵 い、いつ? 何処へ行くんだ。アメリカの……。

麻子の声 今、もう直ぐ。……ヘンリーと一緒にです。

仙蔵 今、何処だ、何処にいるんだ麻子ッ!

麻子 横田基地……軍用機で行きます。……明日と明後日の御食事、戸棚の中にあります。

仙蔵 麻子、もしもしもしもし。

(電話切れる)

仙蔵、呆然と受話器を握ったまま立ちつくす。

——そして静かに二階へ上ってゆく。

O・L

仙蔵の声 裏切り者! ……裏切り者、何度つぶやいてみた処で、みじめになるのは結局私自身だ。……麻子にだつて云いたいことは山ほどあったに違いない。それを云い出させないものが、私の方にもあったんだらう。あいつは、私の決めた富永との結婚に失敗して帰った時も、私には非難めいたことは一言も云わなかった。それ以来私の面倒を見続けて来た。もう二十九だ。あのヘンリーツて米兵と恋におちた時、もう人の為に生きるのは御免だどつくづく感じたんだらう。

(ベルがしきりに鳴っている)

26 台所・居間(昼)

無人。

電灯がついたままになっている。

27 玄 関 (夜)

警官の声 もしもし、真山さんッ！……真山さん、居ませんか……真山さん！
 玄関をガタピシやって、警官が泥酔した仙蔵を抱く様にして入って来る。

警官 何だ、開いてるのか……真山さん！……誰か居ませんか？
 仙蔵、上りかまちに崩折れる。

仙蔵 誰も居るもんか。

警官 困るなあ、間違はなく、あんたの家なんだね。

外から久尾がやって来る。

久尾 どうしたね、……あれ、あれ真山さんッ。

警官 この人だね

久尾 離れを借りてるもんですがね、真山さん！（警官に）どうしたんです。このよ
 れ様は……。

警官 誰もいないの？ この家。

久尾 麻子さん！ 麻子さん！

仙蔵 云うなッ！……麻子さんか居やしない。

久尾 ハハ、威張ってるよ……さあ、もう少し元気を出して……。

仙蔵 帰ってくれ、……放つといってくれッ！

警官 この人、党员かね。

久尾 党员って、共産党？……馬鹿な……昔は大東亜省の次官までやった人ですよ、若

い人には大東亜省なんて云ったって判らんでしようけど……。

警官 駅前で飲んで、突然アメリカの兵隊にぶつかって行ったんだ。逆に一辺に突き
 倒されちゃったんだけどね。

久尾 へえ、……そりゃきつと、長男が南方でとられてるからですよ。……一寸手をか
 して呉れますか、ここじゃ仕様がな、……さあ立った立った。

警官と久尾で仙蔵を居間の方へ運んでゆく。

28 居 間

廊下をやって来て、

警官 あッ泥棒だ。

久尾 こいつはひどい……真山さん、大変だよ……御覧なさい。

仙蔵 な、何でもない。

警官 電話ありましたね。

警官、行きかける。

仙蔵 ま、待ってくれ、……わしがやったんだ。散らかってるだけだ。……放つとい
 くれ。

久尾 どうしたんです、真山さん！

仙蔵 何でもないんだ、何でもないんだ！

久尾 何でもないことはないでしょう。

仙蔵 何でもないんだ。

警官 じゃいいですね。何かあったら交番へ連絡して下さい。
久尾 どうも、済みませんでした。

警官 戸締りに気をつけて下さいよ。(去る)

仙蔵、むっくり起き上る。

仙蔵 君、麻子が行ったよ、アメリカへ……。

久尾 アメリカへ？ 麻子さんが?! 何しにです？

仙蔵 アメリカ兵と一緒に……。

久尾 (驚ろいて) 結婚ですか。

仙蔵 ……フン、クソッ!

久尾 又、べらぼうに急だったんだね。

仙蔵 別に、君に断る必要もないだろう。

久尾 そらそうだけど……へえ、そうですか、アメリカへねえ……何処です、アメリカの……。

仙蔵 何処でもいいじゃないか……アメリカはアメリカだ。(と自分で云って) 一々アメリカと云うな。

久尾 おかわいそうに……あんたも子供にだけは恵まれなかったね。

仙蔵 何だと?!

久尾 いや、縁が無かったって云うんですよ。子供には……。

仙蔵 かわいそうにとは何だ。……めぐまれなかったとは何だ。もう一度云ってみろ。……洋一は国を代表する調査隊の隊長だぞ……省の部内でだって囑望されてたんだ。今

生きてりや、生きてさえいれば、本省の部長は堅いんだ。

久尾 生きてりやねえ。

仙蔵 ……健二だって……今じゃちゃんとした……。

仙蔵、這う様にして押入れの処まで行くと開けて、

仙蔵 見ろッ! 写真屋にや絵の良し悪しは判るまいが……。

二、三枚の油絵の額を出す。

仙蔵 麻子だって……麻子だって……五年もこのわしの面倒をみて来たんだ……。わしは、親のすねかじりは一人も育てなかった、……自分の脚で、ちゃんと歩ける人間にしたかったんだ。

久尾 そんなら、何も、こう酔っぱらうこともないだろう。

仙蔵 わしの子供にケチをつけてみる。ただではおかんぞ。

久尾 判りましたよ、判りましたよ、……さ、着物脱いで……布団は何処なんです？

布団は？

久尾、布団を探し、麻子らの小布団を引張り出して敷き出す。

仙蔵 いいんだ、……これでいいんだ(まだぶつぶつ云っている)……子供は可愛がるもんだ、子供に可愛がられるものじゃない……それでいいんだ。

うずくまる仙蔵の頭に、

悲しそうな、恥かしそうな洋一の眼、

怒ってかみつく健二の顔、

ケタケタ笑う麻子の顔――が浮かぶ。

仙蔵 母さん、麻子まで行っちゃったよ。
久尾 布団を敷くのに、額を片づけて、
因果な人だなア。

29 デッサン

一艘になった曳船。(小さく)

仙蔵の声 麻子からはその後、二ヶ月ほど経ってから、初めての便りがありました。今では三人の子供をかかえて倅せな毎日を送ってる様です。……麻子ももう三十八になってるんですね。

30 緑生園、仙蔵の部屋

——絵が壁に掛かっているのを、仙蔵と紀子が見ている。

——静男が紀子のひざを枕に毛布をかけて貰って寝ている。

仙蔵 ねえ、紀子さん、(と静男を見て) 親は子供を少しでも立派な人間にしようとするが、育てゆくのは子供自身の力なんだ。その力は、いつか親父の理解の外へまでふくらんで、胎児がヘソの緒を切って生まれる様に、親の理解から飛び出してゆく……その糸が切れる痛さ苦しさは、母親の陣痛にも似たものだ。……自分の分身が、手塩にかけた子供がそむいて去ってゆく……淋しいことだ、全くやりきれんことだよ。だがそれが親子と云うものなら仕方がないじゃないか。健二にしたって、何も好んで私に反抗したわけじゃない……親父に抵抗し、私と云う壁をつき破ることで自分の人生に突進んで

ゆく糸口をみつけたのだ

紀子 お父さま……。

仙蔵 三人の子供が去ってゆく度びに、私は嫌が応でもそのことを教えられた……いや私だけが特別な経験をしたわけじゃない。一人前の子供を持った親なら、誰でも一度は呑まなければならん苦い薬なんだよ。

紀子 お父様のお気持、健二によく伝えます……。

仙蔵 まあ、今度ここへ入る気になったのも、親を卒業した男の一つの生き方として私なりに考えたつもりなんだ。人は私達老人の生活を余生だと云うが……私はその余った命をこれからは積極的に自分自身のために使おうと思うんだよ……老人の我が儘かもしれないがね。

紀子 よく判りました。

仙蔵 ハハ、よく寝たナ、……そうやってると、健二の小さい時そっくりだ。

紀子 そうですか、静男ちゃん、静男ちゃん起きなさい、帰りますよ、……(時計を見て) でも、お父様、たまに遊びに来るのは構いませんでしょ。

仙蔵 ああ、大歓迎だね、……お互いに都合がいい時だけ親子としてつき合えば、それが一番いいんだよ。

静男、起きてキョトンとしている。

紀子 さあ、お爺さまにさよならして。

静男 (仙蔵をまじまじ見て) やっぱりおじいちゃんかア……。

紀子 まあ、何てことを、この子は……。

仙蔵 ……散歩がてら、その辺まで送っていきこう……静男君、電車の中で寝ると風邪をひくぞ。

静男 寝ないよ。

仙蔵 又おいで。

静男 うん。

三人、それぞれに出てゆく。

31 養老アパートの廊下

三人、出て来ると、静男を真中に手をつないで歩いてゆく。

O・L

32 デッサン

一枚板の仮橋を渡る旅人の点描。

(終)